

# 花立・坊山塚群発掘調査報告書

—平成3年度の調査—

1992

寺泊町教育委員会

# 序

平成3年の春に行なわれた花立塚群の発掘調査が大きな成果をおさめ、ここに終了いたしました。関係諸氏のご尽力に心から敬意を表し、お礼を申し上げます。

寺泊町を含めた西山丘陵とそれに併走する曾地丘陵及び島崎川流域は、先人の築いた遺跡が数多く存在しています。特に寺泊町には新潟県の指定文化財記念物史跡に指定された「横滝山廃寺跡」をはじめとする重要な遺跡もあり、また一昨年には隣の和島村の八幡林遺跡において、歴史的な発見があったとも聞及んでおります。

近年、社会の急速な進展により我々の生活環境も大きく変化し、それに伴う開発事業も多く計画されております。これらはまた、町の貴重な財産である文化遺産が破壊の危機に瀕していることの表れでもあります。

本来、こうした遺跡は、我々郷土の歴史的遺産であり、現状のまま保存し後世に伝えていくことが、現代に生きる私どもの責務といえるわけですが、やむをえず開発しなければならない場合は、事前に発掘調査を行ない、記録保存の形をとらざるを得ないと考えております。

今回の調査も、リゾート開発の1つであるゴルフ場の造成に伴う発掘調査であり、文化財の保存についての十分な協議・審議を重ね、必要最小限の範囲内で発掘調査を行なったものであります。

この調査により、和鏡などが発見されており、古く数百年前の人間の生活や風習、宗教観などを偲ばせるものが数多くあります。まさに古代史のロマンを限りなく広げてくれる調査でありました。

詳細は、本報告書に譲ることといたしますが、この報告書の発刊にあたりまして、発掘を担当されました柴繁治氏及び小林義廣氏、新潟県文化行政課の諸氏、また調査にご協力をいただいた方々に、改めて深甚なる謝意を表する次第であります。

平成4年2月

寺泊町教育委員会 教育長 長谷川 達 栄

## 例 言

1. 本報告書は、新潟県三島郡寺泊町大字志戸橋字中ノ坪・字牛水・字越巻・字北ノ入地区に所在する花立1・2号塚、坊山1～4号塚の発掘調査記録である。発掘調査は、(仮称)「寺泊カントリークラブ」ゴルフ場建設計画に伴い、寺泊町教育委員会が平成2年度にヨネックス開発株式会社から受託して実施したものである。
2. 本跡の発掘調査は、寺泊町教育委員会が調査主体となり、平成3年3月4日から3月26日まで実施したものである。
3. 遺跡での土層断面の実測・写真撮影・遺物の整理作業は調査担当者の秦繁治・調査員の小林義廣があたり、土層断面の実測では高花宏行(東洋大学未来考古学研究会員)の助力を得て行なった。なお現状実測図と基底部実測図の作成は、(有)寺泊測量設計に依頼した。
4. 遺物の実測・写真撮影・図版の作成には、秦・小林があたった。
5. 発掘調査における出土遺物は、一括して寺泊町教育委員会が保管・管理している。
6. 本報告書の執筆は秦と小林とで行なった。なお、執筆者については各文末に明記した。
7. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々や関係機関から御協力と貴重な御教示を賜った。厚く御礼を申しあげる。(敬称略、五十音順)

家田順一郎 岡本 郁栄 小野塚徹夫 駒形 敏朗 駒見 和夫  
佐藤 俊幸 鈴木 俊成 高橋 知之 高花 宏行 寺村 光晴  
田海 義正 戸根与八郎 藤巻 正信 山崎 龍教 鹿島建設(株)北陸支店  
上中越営業所 (有)寺泊測量設計 新潟県教育庁文化行政課  
ヨネックス開発(株)

8. 発掘調査体制は次の通りである。

調査主体 寺泊町教育委員会 教育長 長谷川 達栄

調査担当 秦 繁治 (新潟県文化財保護指導委員)

調査員 小林義廣

事務局 青木昌栄 加藤輝夫 星 博 (寺泊町教育委員会)

発掘調査にご協力いただいた方々(敬称略)

足立 セツ、青柳 ハナ、青柳 カト、足立 順子、青柳百合子、笠原 イト

笠原 チヨ、矢部藤一郎、近藤 キミ、星 共家、阿部 栄治、徳永峯恵子

大谷 幸子、西村 コノ、西村 ヌイ、光村 ルイ、光村 セイ、阿部 清作

広川 知利、阿部 チイ、布施 金吾、山田 正治、吉野キミエ、岡村 清枝

近藤シゲ子、山岸 松江、青柳ミサ子、野田 チヨ、中村利登子、渡辺 文男

# 目 次

序	寺泊町教育長 長谷川 達栄	
例 言		
I 序 説	.....	1
1 発掘調査に至る経過	.....	1
2 発掘調査の経緯	.....	2
II 遺跡の環境	.....	3
1 地理的環境	.....	3
2 歴史的環境	.....	5
3 周辺の遺跡の名称	.....	7
III 遺構と遺物	.....	8
1 花立1号塚	.....	8
2 花立2号塚	.....	14
3 坊山1号塚	.....	19
4 坊山2号塚	.....	21
5 坊山3号塚	.....	21
6 坊山4号塚	.....	24
IV ま と め	.....	27
1 塚の特色	.....	27
2 埋納和鏡	.....	27
3 塚の構築年代	.....	28
〔追 記〕	.....	28

# 図版目次

第1図 花立・坊山塚群の配置図	.....	4
第2図 周辺の遺跡	.....	6
第3図 花立1号塚平面図	.....	9
第4図     "     基底部	.....	10
第5図     "     断面図	.....	12
第6図     "     出土遺物	.....	13
第7図 花立2号塚平面図	.....	13

第8図	花立2号塚断面図	16
第9図	“ 基底部	17
第10図	“ 出土遺物	17
第11図	坊山1号塚平面図・基底部	18
第12図	“ 断面図	18
第13図	“ 出土遺物	20
第14図	坊山2号塚平面図	20
第15図	“ 断面図	22
第16図	“ 基底部	22
第17図	“ 出土遺物	22
第18図	坊山3号塚平面図	23
第19図	“ 断面図	23
第20図	“ 基底部	25
第21図	坊山4号塚平面図	25
第22図	“ 断面図	26
第23図	“ 基底部	26

## 写 真

第24図	花立・坊山塚群の遠影	29
第25図	花立1号塚	30
第26図	花立1号塚 断面図・基底部	31
第27図	花立2号塚・坊山1号塚	32
第28図	花立2号塚 断面図・基底部	33
第29図	坊山塚群	34
第30図	坊山1号塚 断面図・基底部	35
第31図	坊山2号塚 断面図・基底部	36
第32図	坊山3号塚 断面図・基底部	37
第33図	坊山4号塚 断面図・基底部	38
第34図	遺物 土器・陶磁器	39
第35図	遺物 鏡・金属製品・銭貨・石製品	40

# I 序 説

## 1. 調査に至る経緯

寺泊町の大字志戸橋地内及び山田地内は町の南端に位置し、これまで開発行為もなく小高い山の間に沢が深く入りこんでおり、主に水田として利用されていたが、沢の奥は水田転作のありを受けて山林とともに自然のままの状況であった。

平成元年7月13日にヨネックス開発株式会社よりこの地域のゴルフ場建設計画に伴う埋蔵文化財の取扱についての事前打合せがあり、花立1～4号塚其他周知の遺跡について県文化行政課と協議を行なった。

これを受けて平成元年8月21～23日に県文化行政課の戸根与八郎主任・亀井功文化財主事の指導のもと計画地内の分布調査を実施した。この結果、周知の遺跡である花立1～4号塚の他に塚が4基（坊山1～4号塚）確認された。また「越後野志」に記載があり位置の不明であった明ヶ谷城跡と思われる空堀、削平地等が確認され、海岸部に併走する尾根上に戊辰の役に関係するものと予想される土塁状の高まりが見つまっている。また、坊山1～4号塚は平成2年2月19日付けで文化財保護法第57条6による発見通知がなされ周知化が行なわれた。一方、城跡については平成2年5月24日に県文化行政課佐藤俊幸専門員其他により、他の確認調査に来町した際に再び踏査を行ない、さらに空堀と削平地があることを確認している。ただし、位置が山田地内にあり明ヶ谷城跡とは判断し難いとのことであった。

これらを受けて、平成2年9月17日付けでヨネックス開発株式会社より大規模開発行為に伴う事前協議書が提出され、その中で一部計画変更が生じ、花立1・2号塚、及び坊山1～4号塚が造成工事内に入る事になり発掘調査の必要が生じてきた。

寺泊町教育委員会は、県文化財保護指導委員の秦繁治氏に発掘担当をお願いし、平成2年12月19日に同氏に来町を願い、現地の下見と調査期間・調査方法について打合せを行なった。その結果、発掘調査を平成3年3月4日より行なうことが決定した。

平成3年2月4日付けで文化庁へ文化財保護法第98条2による発掘調査の通知を行ない、平成3年2月5日付けでヨネックス開発株式会社と発掘調査についての委託契約を交わした。

平成3年3月3日までに塚上および周辺の樹木の伐採と、塚の現況実測図作製完了を待って、3月4日から、人力で発掘調査することとした。また、地元の志戸橋集落に作業員の確保、発掘用具の借用等を依頼した。この間、発掘用具の購入、作業員の休憩所の借用等を行い、3月4日から発掘調査を実施することができた。（星 博）

## 2. 発掘調査の経緯

平成3年3月4日から3月26日までの花立・坊山塚群の発掘調査の経緯を略記する。

3月4日～12日

積雪で覆われた花立1・2号塚を前に、9時から発掘調査団の編成と発掘調査開始式を積雪の上で行なった。

発掘調査は花立1・2号塚、坊山2・3・4・1号塚の順に人力で実施することとした。調査は、内部構造確認のため各塚とも、幅50cmの十字ベルトを残し、盛土を土層別に排除することを基本にした。

花立1・2号塚の径が大きいので、米字状ベルトを残して、盛土を土層別に排除した。2号塚の表土から寛永通宝を1点発見した。1・2号とも表土・黒色土層排除後、精査を行なうが葦石などの遺構や土壙らしき遺構は存在しない。1・2号とも、中央部の表土とその直下の黒色土層中に木炭が多量に含まれていた。1号の南西基底部に炭化物を充満した土坑を検出した。2号の表土層中から磁器が、北西側の旧表土から古式土師と推定される土器片が、また旧表土中から凹石を検出し、1・2号とも地山面から溝らしき土坑と柱穴らしい土坑を数基確認した。

3月13日～20日

坊山1-4号塚に十字ベルトを残し、盛土を土層別に排除した。13日寺泊町議会議員が来跡。花立1・2号の米字状のベルトのうち十字ベルトを残して排土、花立1・2号の北・北東側に溝状遺構を検出、ついで東西ベルトを残して他を排除した。花立1号の東西ベルト中央の封土中に幅約90cm、深さ約60cmの堀り込みが認められ、そのほぼ中央部より下位に南面して、直立した状態の和鏡1点を検出した。この堀り込みは、塚のほぼ中央表土下に確認された焼土の下約60cmに木炭を含む黒色土が検出された。坊山1号の表土下から須恵器の破片が検出され、坊山2号の表土下から石造物が検出された。また2号中央北側の落込みは自然薯採集の穴と認定した。3号の盛土上部から鉢滓を検出、4号の盛土内に木炭粉を多量に検出した。花立1・2号の土層断面図の作製に入った。19日県文化行政課の鈴木文化財専門員其他3名が来跡し、塚周辺の調査が必要であるとの指導があった。高花伊奈胡城跡確認調査員の協力を得て花立2～3号の土層断面図の作製に入った。

3月21日～26日

春分の日である21日も実測図作製・実測図が完了した坊山4号・3・2号の順に基底部を検出したが遺構は見当らなかった。花立1・2号の基底部を検出し、溝・柱穴・土坑などを確認した。坊山1号の土層断面図を作成した。25日は県文化行政課の田海文化財専門員が来跡し、花立1号の南側、2号の北側などの遺構確認が必要とのことであった。25・26日は、写真撮影を行い地山面の測量は(有)寺泊測量に依頼して、すべての発掘調査を完了した。(峯 繁治)

## Ⅱ 遺跡の環境

### 1. 地理的環境

寺泊町は新潟県のほぼ中央部に位置し、信濃川の左岸にあたる日本海沿いの町である。佐渡海峡を隔てて、佐渡が島に相對している。町は北東に走る海岸線に雁行して、狭い海岸平野と西山丘陵が北に走り国上・弥彦山に連なる。中央は北東流する島崎川の沖積平野。その東側は曾地丘陵である。町の東側と北東部は信濃川と大河津分水路を境として新潟平野へと連なっている。

西山丘陵は標高60～90mの低い丘陵で、この丘陵の連なりは南南西から北北東の方向を示し、北側は国上・弥彦・角田山へと続いている。地層は背斜構造で構成されている。この丘陵の東側は丘陵の構造線に直交する数多くの谷が形成され、開析が著しく進んでいる。海岸側は谷幅が狭く、奥行きのある沢が数多く存在している。

構造谷を北流する島崎川は出雲崎町相田小木ノ城跡に源を發し、兩岸に沖積面を形成しながら当町小豆曾根に至る延長18.3kmの河川で、かつて当町から分水町にわたる広い範囲に円上寺瀉が存在し、島崎川はこの瀉に流入していた。下流域の夏戸から鱒口・竹森は常に湛水や水害になやまされたという。特に信濃川洪水の影響を常に受けていたといわれている。

第一次大河津分水工事は1870（明治3）年—1873年の間である。このため島崎川が遮断され排水不良になったため、1872年島崎川を日本海に落すべく、従来の郷本川を逆流させるように開削されたもので、1873年に完成した。1909（明治42）年に始まった大河津分水工事は1922年に通水された、この工事の付帯工事として島崎川の排水改良のため北から円上寺隧道堀削・郷本川の改修・落水悪水路の開削が行なわれた。その後1961（昭和36）年8月の集中豪雨では、山崩れで郷本川が塞き止められ、島崎川下流一帯は湖水化した。この水害に鑑みて、郷本川には従来の落ち口とは別に郷本隧道が堀削され、円山寺隧道は別にもう1本隧道が堀削され、落水悪水路も改修された。現在郷本川は島崎川の本流のような状態になっている。

島崎川の右岸の丘陵は、東頸城丘陵の北端に位置する西山丘陵で、標高200～300mを測り、妙法寺峠-地藏峠-二田城-薬師峠-小木ノ城-中永峠-剣ヶ峰峠-笠拔山-塩之入峠と続き、徐々に高度を下げてその北端は当町敦ヶ曾根で新潟平野に没している。

本丘陵の東および西側も西山丘陵の西側と同じように、谷幅は狭く、奥行きのある沢が数多く存在している。

集落は耕地との関係から沖積地と丘陵の境界部や、西山・曾地丘陵に直行するように刻まれた谷筋の丘陵部にあり、谷筋を一つのブロックとして農業生産が営まれている。



第1図 花立・坊山塚群の位置図

## 2. 歴史的環境と周辺の遺跡

寺泊町は律令時代においては、越後古志郡の一部であり、「倭名抄」に<sup>おおやけ</sup>大家・<sup>くりや</sup>栗家・<sup>ふみほら</sup>文原・<sup>やま</sup>夜間の四郷が、「延喜式」神名帳古志郡六座のうち、近世の地誌などでは桐原石部神社を下桐（現寺泊町）・上桐（現和島村）、都野神社を与板（現与板町）、宇奈具志神社を乙茂（現出雲崎町）に各々あて、また「延喜式」兵部省の北陸道越後国駅馬のうち、大家駅は大家郷に設けられたはずであるが、比定地不詳である。

「延喜式」に「伊神二疋。<sup>いかみ</sup>渡戸船二疋」と記しているものの、比定地については諸説があるが、渡戸船二疋の故地は現寺泊町の中心街附近に推定され、4～5隻の船と二疋の駅馬が配置されており、ここが佐渡へ渡る北陸本道と弥彦神社への支路との分岐駅になっていたものと考えられる。

822（弘仁3）年国分寺の尼僧法光が佐渡へ渡る人や信濃川を旅する者（百姓濟度之難）を救うために、越後国渡戸浜に布施屋（無料宿泊所）を建てたと云う。そのころは泊といい、その後寺尾泊、寺泊浦などと呼び、鎌倉時代に寺泊と称した。1221年順徳帝・1271年日蓮上人・1298年冷泉為兼・1325年日野資朝などがここから佐渡へ渡ったと伝える。大正時代には上杉氏の領地で、近世には高田藩・村上藩の領地となり、米の積み出し港として千石船が出入りし数千俵の越後米が積み出された。

寺泊町の南西に接する和島村大字八幡林に所在する八幡林遺跡から出土した第一号木簡の表側には「郡司符 青海郷事少丁高志君大虫 右人其正身率…」裏側には「虫大郡向参朔告司…率申賜 符到奉行 火急使高志君五百嶋 九月廿八日主帳丈部…」とあり、第二号木簡の表側には「…廿八日解所請養老…」裏側には「…祝 沼垂城…」とある。

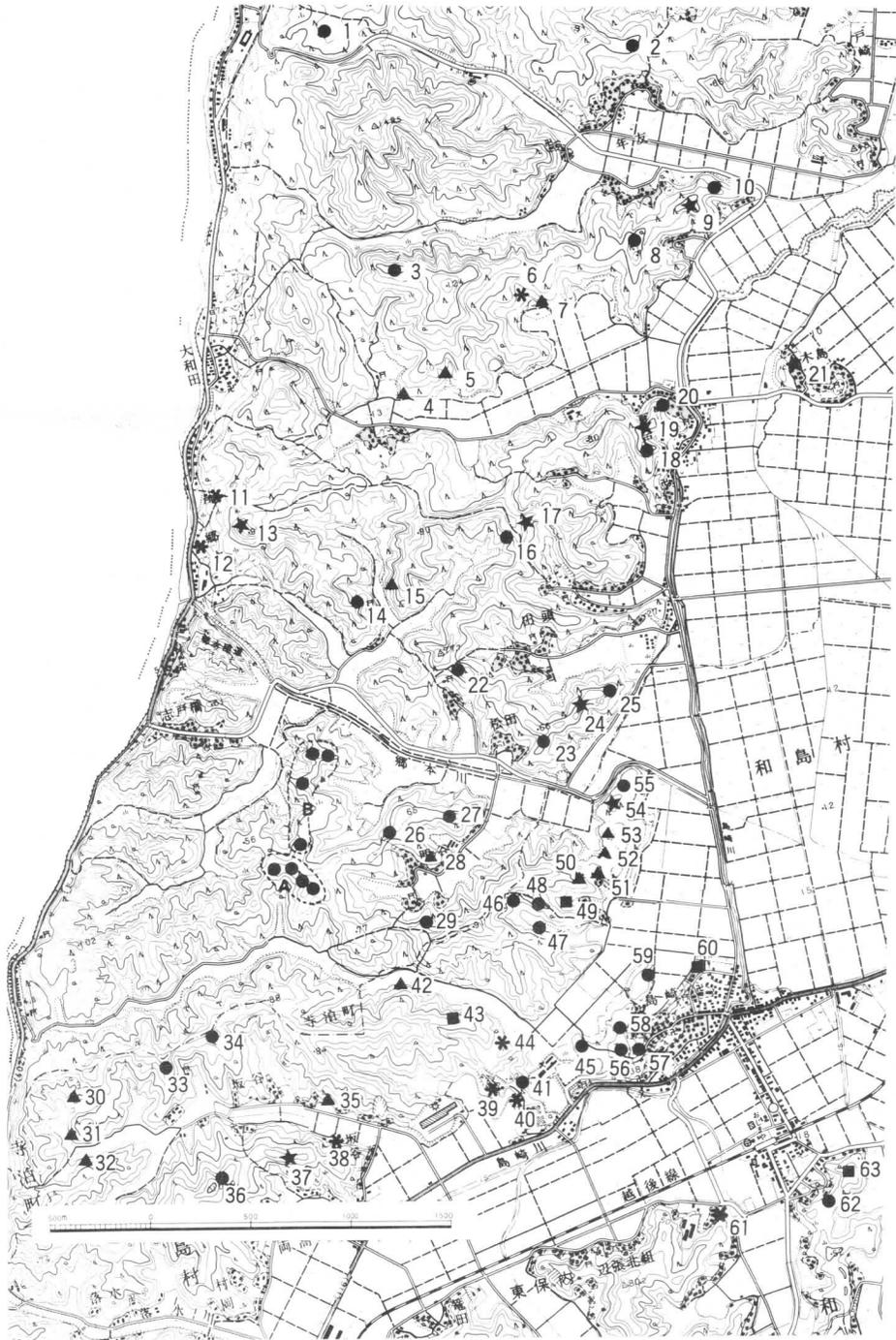
第二号木簡から「沼垂城」と呼称される城柵が養老年間（712～724）に存在して、647年（大化3）に設置し、屯田兵を置いたと日本書紀が伝える淳足柵が機能していたことを示している。

第一号木簡は三片に切断されているが完形の郡符（郡の命令書）である、この郡符は蒲原郡が青海郷（現加茂市）に対して発したもので、郡符により命を受けた「高志君大虫」が木簡を携え、越後の国府に参向して郡命を果した帰路に、木簡を携帯する必要がなくなり、彼は木簡を返納した。この木簡は出土地点で三つに折損して廃棄された。八幡林遺跡はこうした役割を果す関・駅・郡衛などの役所があったことになる。

第二号木簡は前後を欠いているが表に「×廿八日解所請養老×」裏に「×口祝 沼垂城×」と記し、「日本書紀」に示す「淳足柵」が養老年間（717～724）に沼垂城として存在し、機能していたことを初めて示した木簡である。

八幡林遺跡は八世紀前半には、東北経営の最も盛んな時期の官道であり、沼垂城につながる関連施設が所在したであろうと考えられ、交通の要衝であったと云うことができる。

（秦 繁治）



第2図 周辺の遺跡



### Ⅲ 遺構と遺物

#### 1. 花立1号塚

現況 (第3図 図版25図)

東西にのびる尾根上に2基の塚が直線に約25mの距離で並ぶ、その西側にある塚が花立1号塚である。本塚は東西11m、南北11mの方形塚で高さは約1.8mを測り三段方形を呈する。標高は81.37mである。周溝等の外部施設等の痕跡は見られなかった。

封土 (第5図 図版26図3.4 27図)

土層及び土の状態は土層断面図(第5図)に示すとおりである。

I層は表土で10~30cmの厚さを測る黒褐色の腐植土である。

II層は黄褐色土でやや粗い砂粒を含む。

III層は橙褐色土で中に炭化物を混入する。

IV層は橙褐色土で中に炭化物を含まない。

V層は黒褐色土で炭化物が多く混入する。

VI層は地山土で橙褐色を呈する。

以上の土層でII~V層が、入り組んで封土を形成している。

封土中の塚中央部に幅約90cm、深さ約60cmの堀り込みが認められ、その中から和鏡が1点鏡背を西に向けて直立した状態で検出された。この堀り込みは塚の三段目の造成後に堀り込まれたもので、和鏡の埋納前に三段目の塚が造成されている。

基底部 (第4図 図版25.26図)

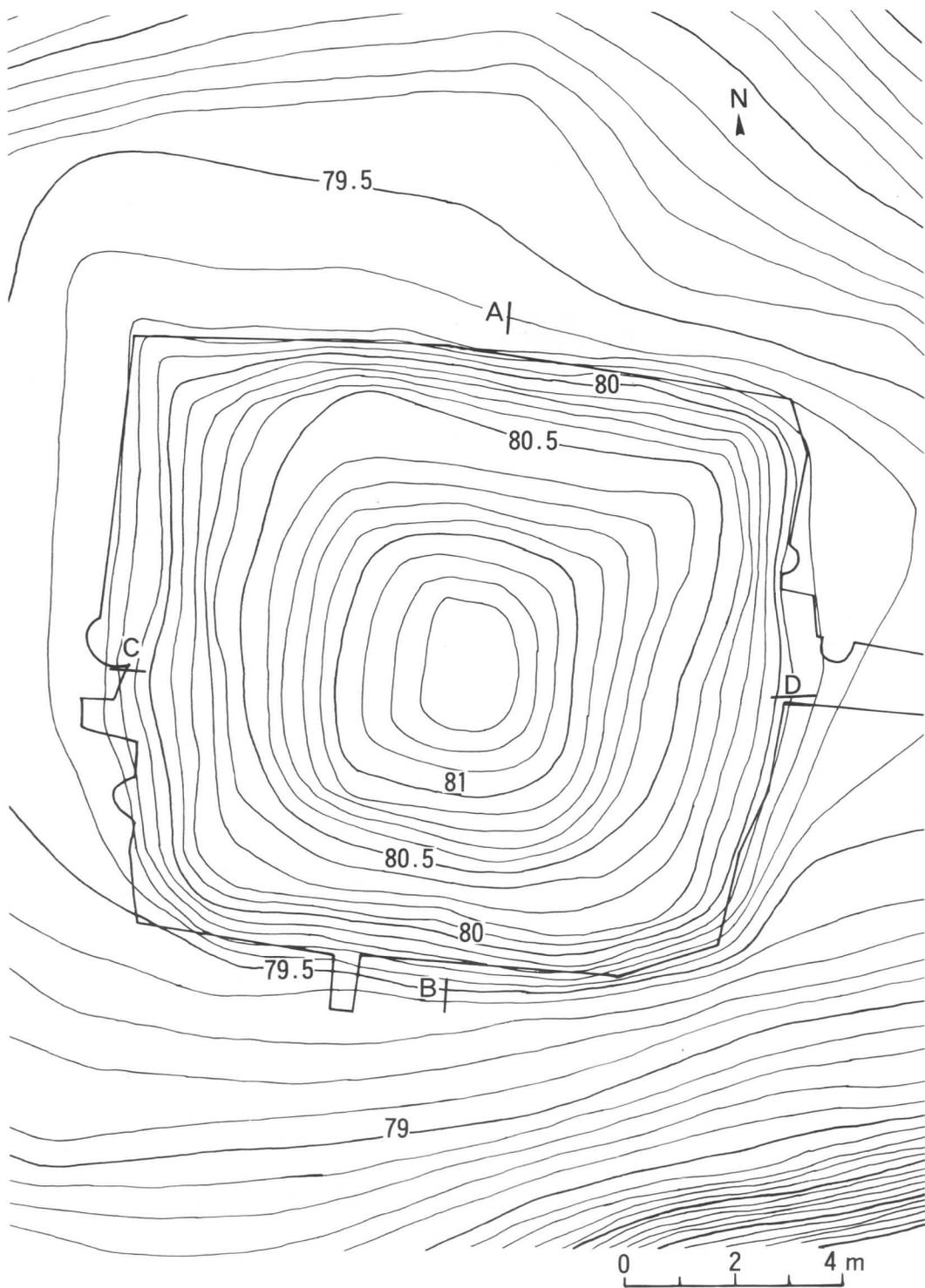
30~40cm地山を削り出して基底部を作る。基底部には土坑2基、溝状遺構1基、穴23基が認められた。

(1) 土坑 1号土坑は塚の南西側に長径、短径ともに約50cm、深さ約13cmの隅丸方形を呈して地山面を堀り込んである。土坑中には炭化物と形状不明の鉄片が検出されている。

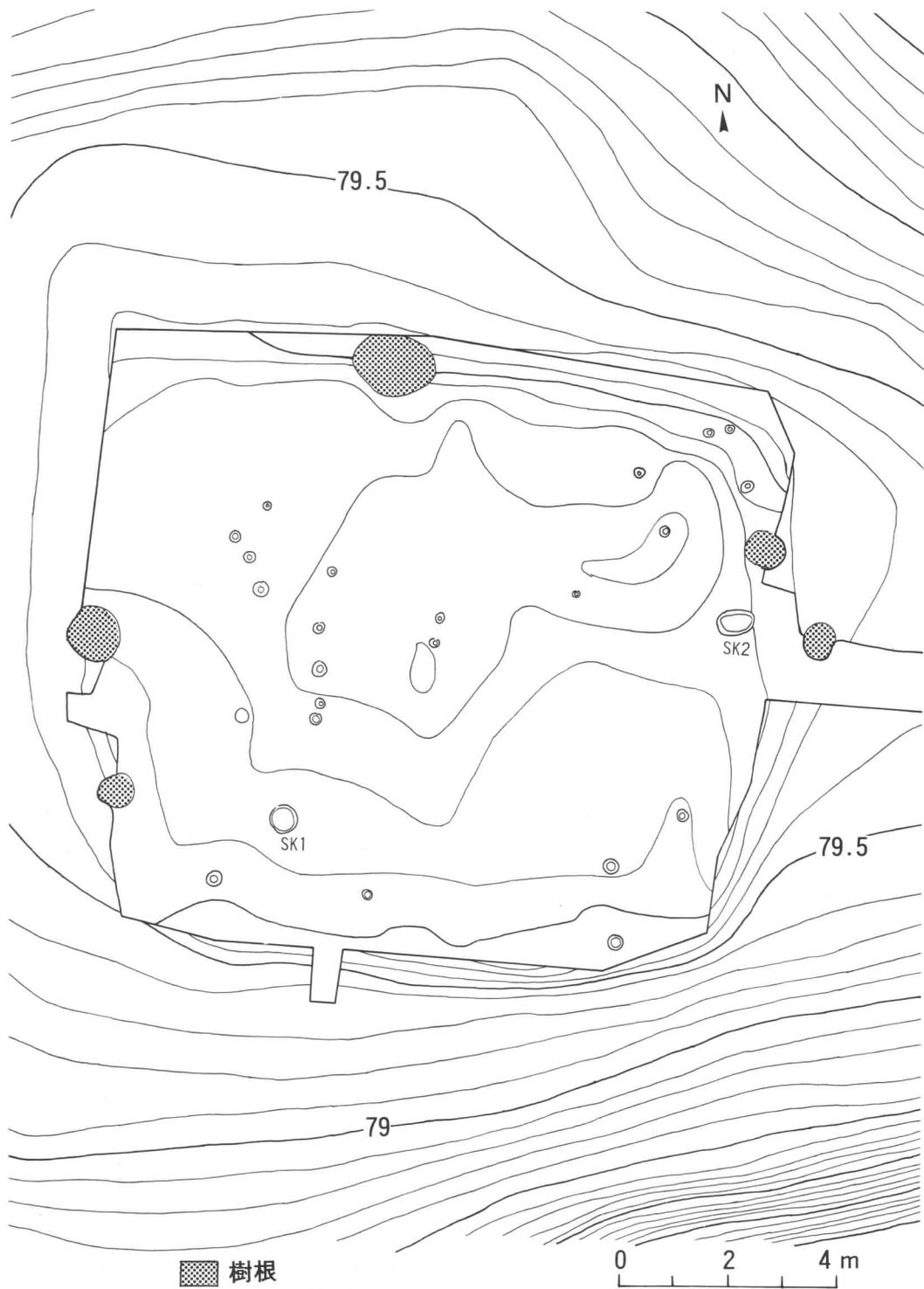
2号土坑は塚の北東側に長径約80cm、短径約60cm、深さ約8cmの楕円形を呈する浅い窪みである。土坑中には炭化物の他は遺物は認められなかった。

(2) 溝状遺構 北側に長さ220cm、幅20cm、深さ12cmの溝状遺構が検出されたが、遺物の検出はなく他の遺構との関係も不明である。

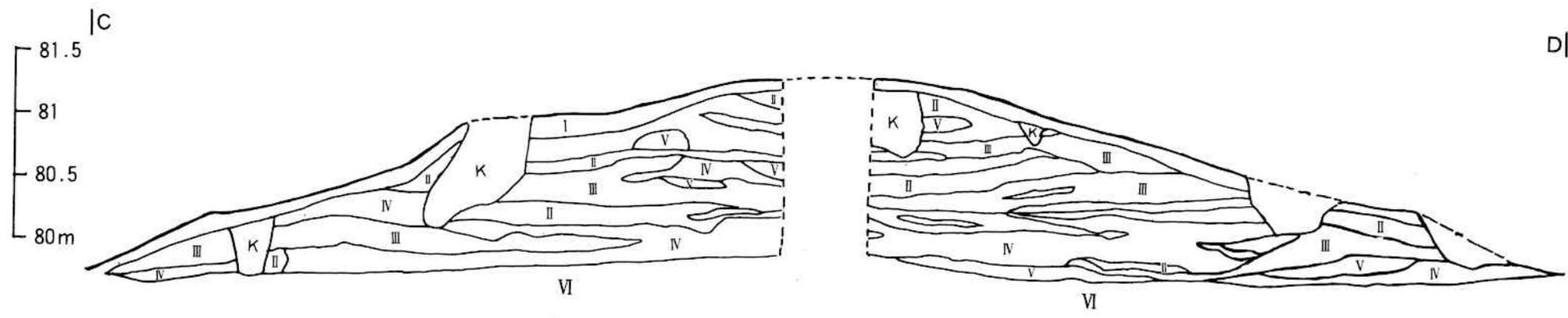
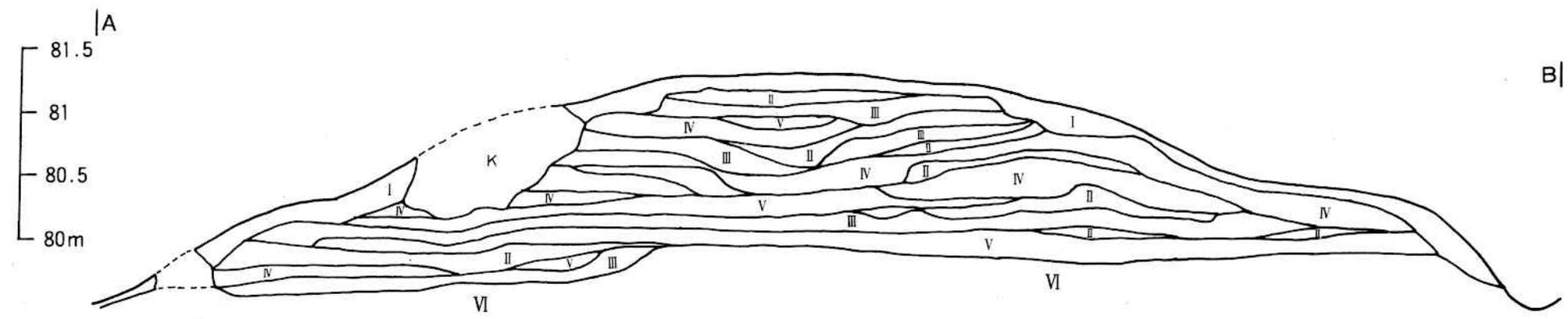
(3) 穴 確認された23基の穴は、直径14~43cmの間で、深さは7~44cmを測る。遺物は西側に所在する穴の覆土中に、花立2号塚から検出された古式土師と同時期と思われる細片が1点



第3图 花立1号塚平面图

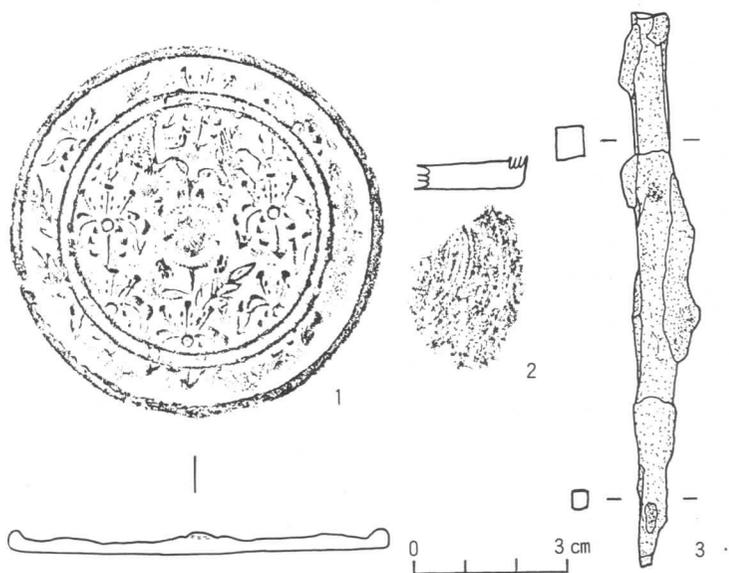


第4図 花立1号塚基底部

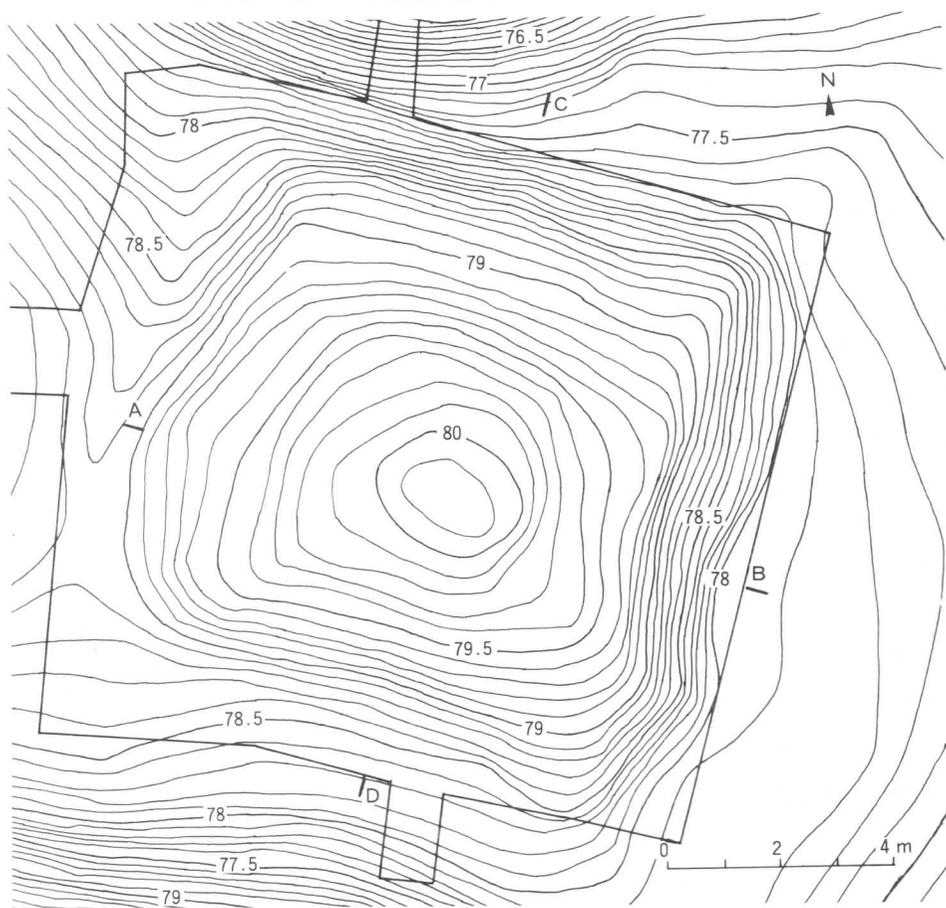


I 黑褐色土 (表土)    IV 橙褐色土    K 樹根  
 II 黄褐色土 (砂粒を含む)    V 黑褐色土 (炭化物混入)  
 III 橙褐色土 (炭化物混入)    VI 橙褐色土 (地山)

第5図 花立1号塚断面図



第6图 花立1号塚出土遺物



第7图 花立2号塚平面图

認められた。

#### 遺物 (第6図1～3 図版35)

本塚からは土器片2点、和鏡1点、和釘1点、形状不明鉄片3点が検出された。

1は和鏡で径7.3cm、厚さ4mmを測り、やや外反する。紐は素文亀紐で中に紐が残る。左右対称に2羽の鶴と桐をあしらったものが8ヶ陽鑄されている。2は土師質土器の底部破片で塚頂上部の表土下直上で検出された。底部には回転糸切が施される。胎土にはやや粗い砂粒を含み、色調は暗褐色を呈する。3は基底部南側からの検出である。現存長11cmで頭部を欠くが和釘と推定される。

## 2. 花立2号塚

### 現況

前記花立1号塚の東側に位置する。本塚は東西約10m、南北約10mの方形塚で高さは約1.8mを測り三段方形を呈する。標高は80.17mである。周溝等の外部施設等の痕跡は認められなかった。

### 封土 (第8図 図版27. 28)

土層及び土の状態は土層断面図(第9図)に示すとおりである。

I層は表土で10～40cmの厚さを測る黒褐色の腐植土である。

II層は黄褐色土でやや粗い砂粒を含む。

III層は橙褐色土で中に炭化物を混入する。

IV層は橙褐色土で中に炭化物を含まない。

V層は黒褐色土で炭化物が多く混入する。

VI層は地山土で橙褐色を呈する。

以上の土層でII～V層が入り組んで封土を形成している。

地山直上のIII層中には古式土師器が検出されており、旧表土層と思われる。

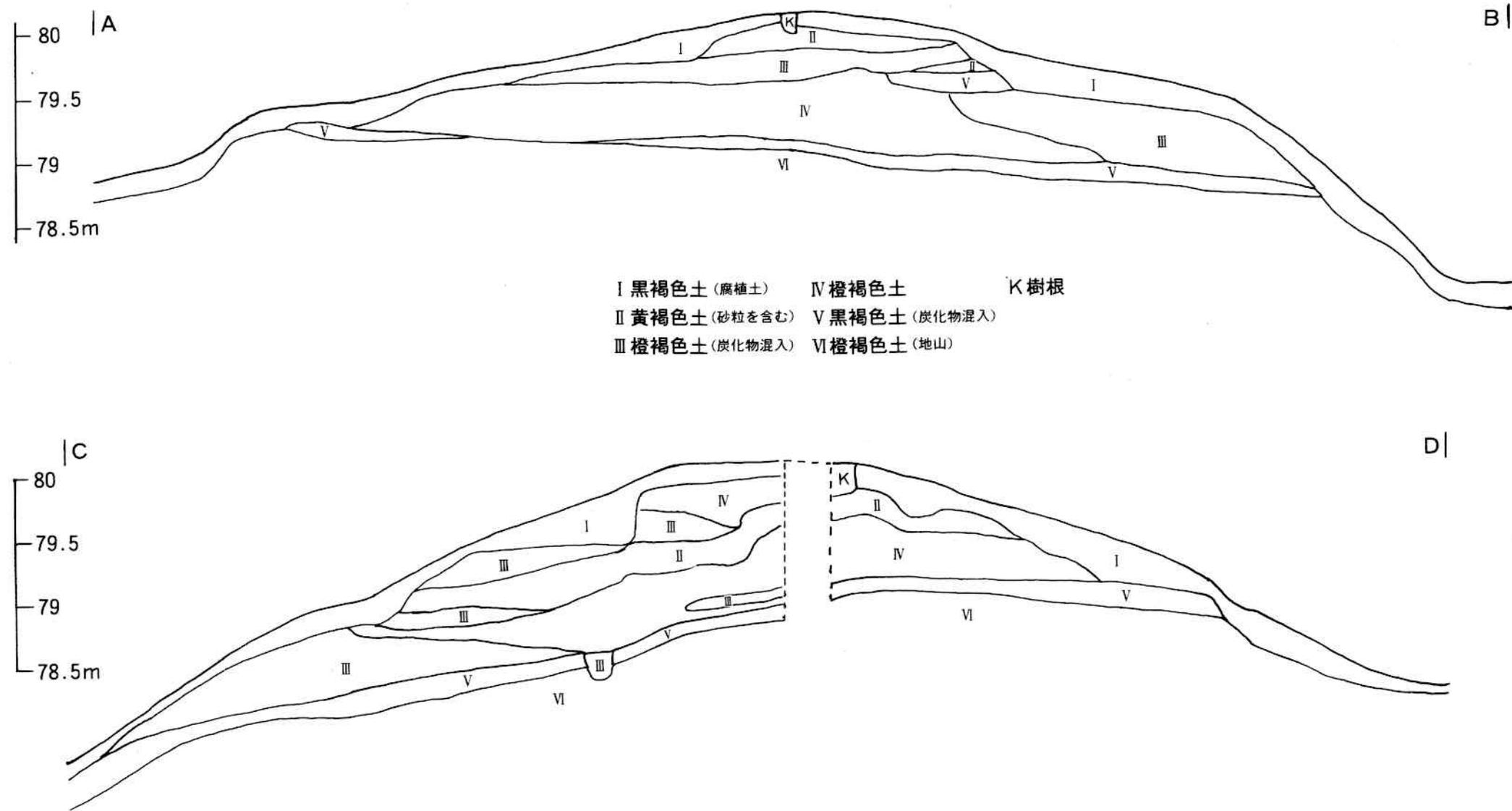
### 基底部 (第9図 図版28)

地山を約40cm削り出しを行なって基底部を作っているが、東側では約80cmを測る。基底部には溝1基、穴36基が認められた。

1 溝 北東側で東西方向に長さ約430cm、幅約20cm、深さ約10cmの溝が確認された。

2 穴 36基の穴が検出された、直径は11～30cmの間で、深さは12～37cmを測る。これらの穴から遺物の検出は認められなかった。

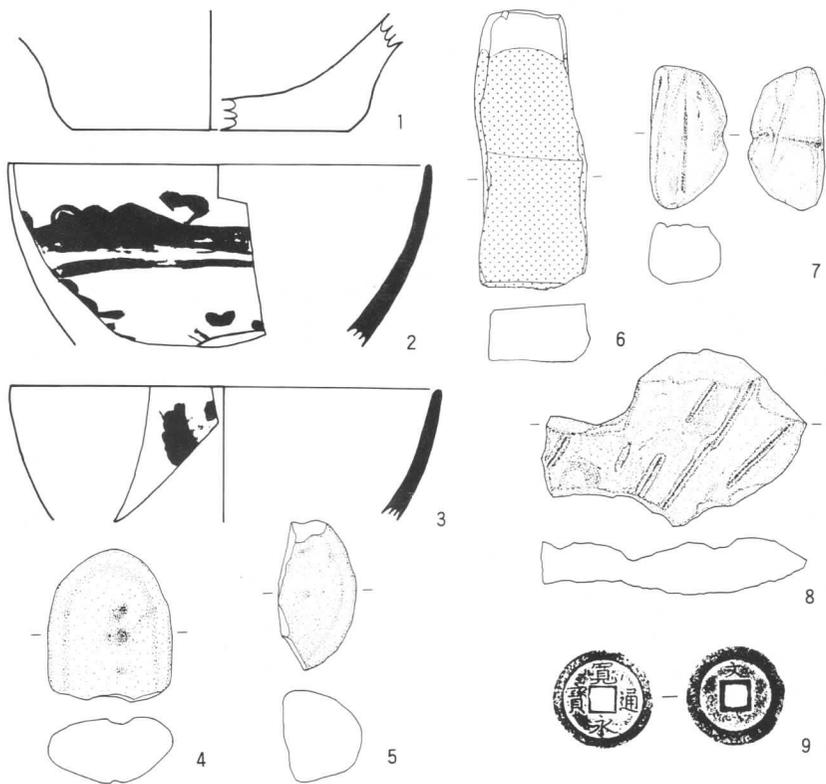
### 遺物 (第10図1～9 図版34. 35)



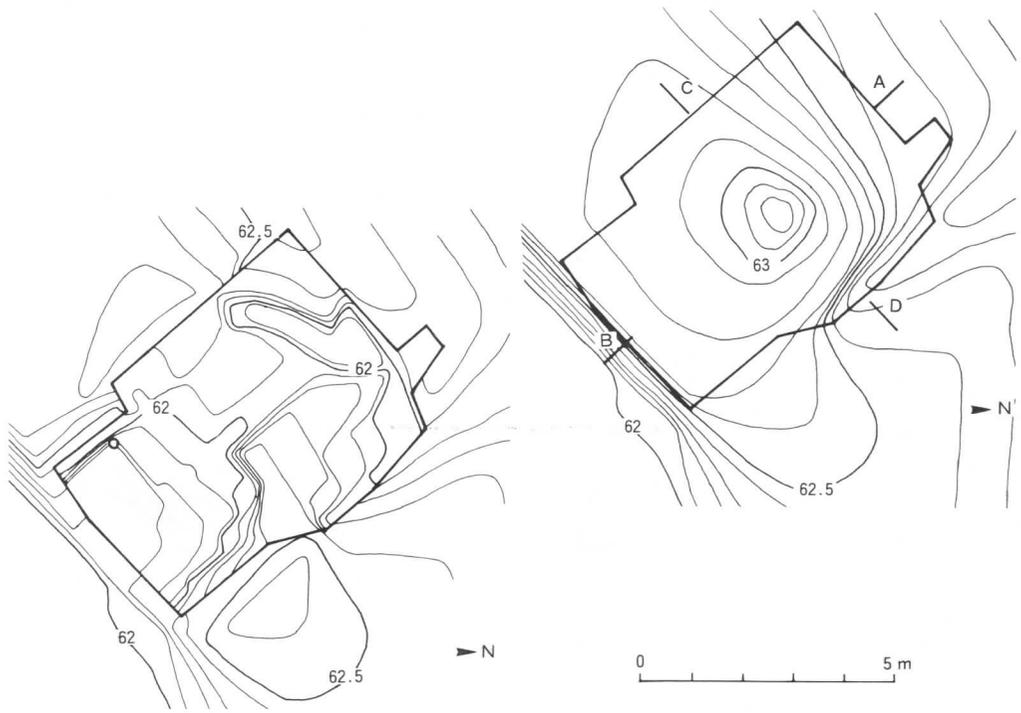
第8図 花立2号塚断面図



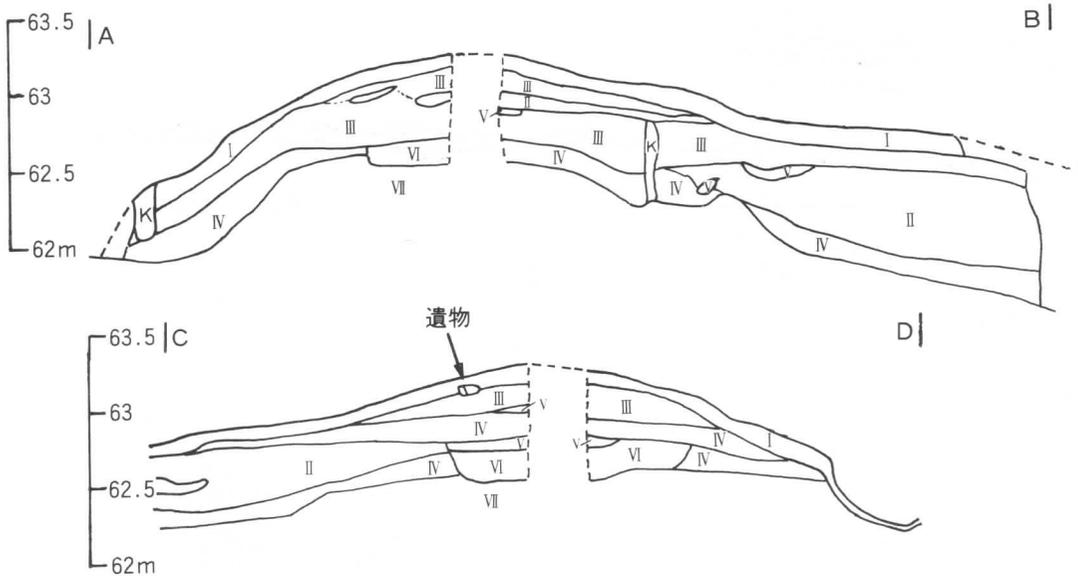
第9図 花立2号塚底部



第10図 花立2号塚出土遺物



第11图 坊山1号塚平面图·基底部



第12图 坊山1号塚断面图

本塚からは古式土師器と思われる土器片 8 点、肥前磁器 2 点、凹石 1 点、磨石 1 点、砥石 2 点、石臼 1 点、銭貨 1 点が検出されている。

1 は基底部の北西側直上旧表土層から出土のもので甕の底部破片と推定される。色調は赤褐色で胎土にはやや粗い砂粒を含む。2～3 は表土層中に検出された肥前磁器である。共に口縁部が胴部より立あがる。コバルトの発色は薄く草花文、山水等が描かれている。色調は乳白色で胎土には細かい黒粒が認められる。4 は凹石で旧表土層中からの検出である。安山岩製で両面に凹みをもつ。5 は磨石で側面に研磨痕を持つ。6 は泥岩製の砥石で南側の表土中からの出土。7 は砂岩製の筋砥石で旧表土層からの検出である。8 は東側の覆土中からの検出で凝灰岩製である。9 は江戸時代の寛永通宝で、寛文 8 年から天和 3 年にわたり 16 年間江戸亀戸村において鑄造された。内郭の上部に「文」の字を鑄込まれた「文銭」で、頂上部表土層中から検出した。

### 3. 坊山 1 号塚

現況 (第11図 図版29図)

山林中に南北約 3.5m、東西約 2 m のやや方形を呈する塚で、約 50cm の高さを持つ小マウンドである。頂上部の標高は 63.27m を測る。

封土 (第12図 図版30図)

土層及び土の状態は土層断面図に示すとおりである。

I 層は約 10cm の厚さを持ち色調は黒褐色を呈する腐植土である。

II 層は暗褐色土で 1～2 mm の砂粒を含む、一部に地山土が小ブロックで混入する。

III 層は暗褐色土で中に炭化物を含みや粘性がある。

IV 層の土質は III 層と同じであるが基底部直上に存在し、旧表土と考えられる。

V 層は青灰色粘質土で IV 層中にブロック状に認められる。

VI 層は黒褐色土で旧表土層 (IV 層) から地山面に掘りこまれた土坑内から認められる。

VII 層は地山土で橙褐色を呈し、粘性はなく砂質である。

基底部 (第11図 図版30図)

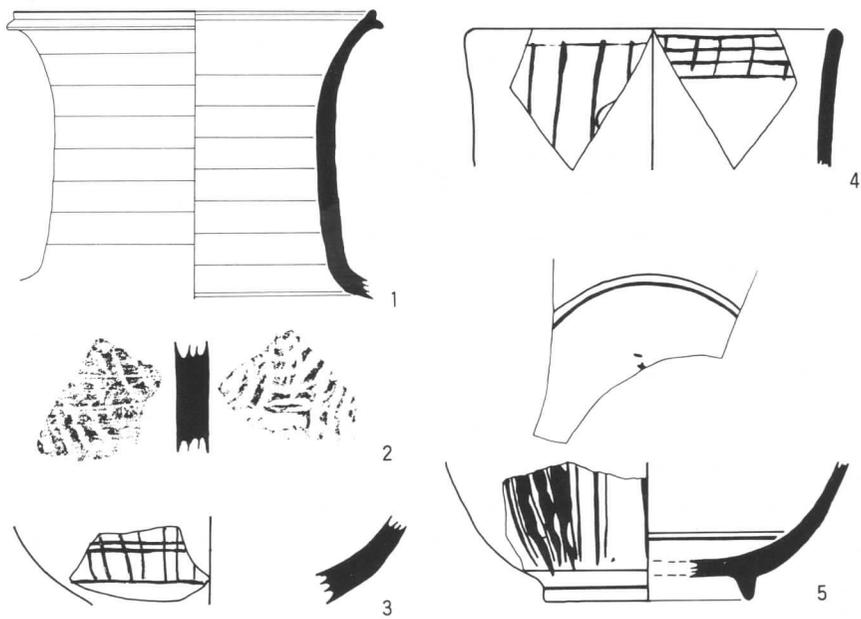
周辺を 20～50cm の高さで削りだしを行なっている。断面図では南西部に溝状のものが確認されたが平面プランとしては認められなかった。

基底部中央に長さ約 1 m、幅約 70cm、深さ約 5 cm の掘り込みが認められた。これは IV 層 (旧表土層) から掘り込まれており、深さは約 30cm となる。この IV 層直上には青灰色粘質土が広がっており、何らかの埋納と思われたが遺物等の検出はなかった。

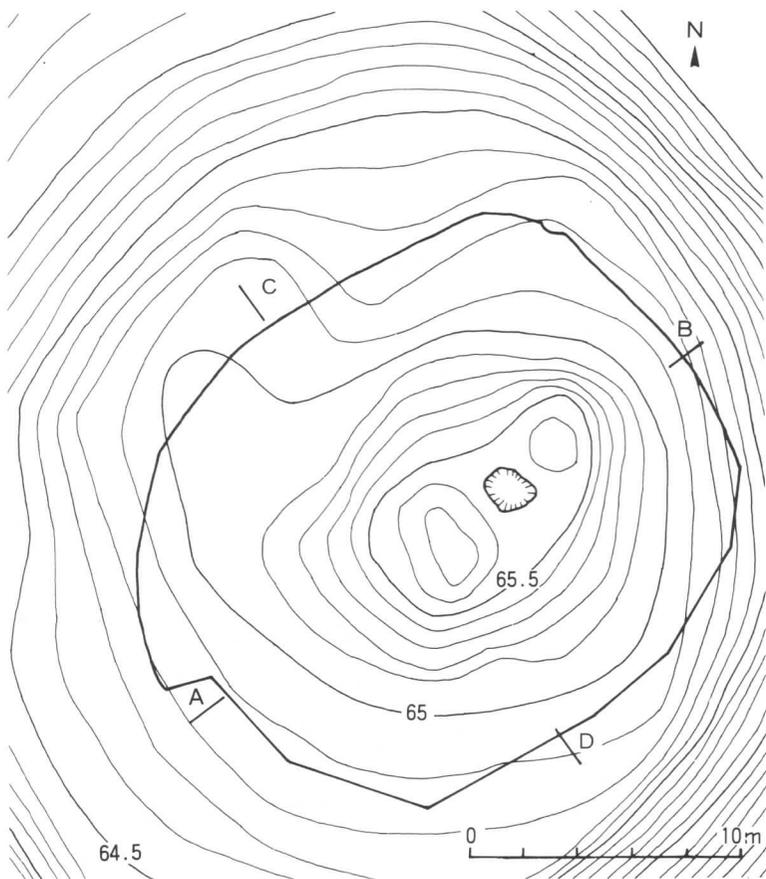
遺物 (第13図 図版34図)

本塚からの出土遺物数は須恵器 2 点、近世磁器 3 点で総数 5 点をかぞえるにすぎない。出土層位はいずれも I、II 層内からである。

須恵器 (第13図 1. 2 図版34図)



第13图 坊山1号塚出土遺物



第14图 坊山2号塚平面图

1は長頸壺で、口縁部よりやや外反気味に立ち上り、口縁端部は上下にひきだされた面をもつ。内外面ともロクロナデ整形がなされる。色調は内外面ともに灰黒色を呈する。時期的には口縁端部の作りより8世紀頃と推定される。I層中の検出で塚造成後の持込みと考えられる。

2は甕で、小破片であるが、外面整形後に棒状工具に縄を巻いた工具で叩き目を施し、内外には同心円の叩き目を施す。色調は青灰色でII層中より出土。混入と推定される。

近世磁器（第13図3～5 図版34図17～19）

3は碗で、肥前系の「くらわんか茶碗」と呼称されているもので、胴下半部の破片である。胎土は明灰色を呈す。コバルトの発色はうすく、ねずみ色がかっている。格子文が描かれている。4は筒形碗と呼称されているもので口縁部破片である。胎土は3と同じでコバルトの発色はうす青色がかっており、外面には垂下文、内面には格子文が描かれている。これらは肥前系の磁器で18世紀に比定される。5は碗で、胎土は白色、釉内には細かな気泡が認められる。コバルトの発色も強く群青色を呈する。垂下文と葉様文が描かれている。内面見込に2つの輪線と井桁文か文字と思われるものが描かれているがさだかでない。産地は瀬戸と思われ、19世紀以降の製作と推定される。

#### 4. 坊山2号塚

現況（第14図 図版29図）

尾根上に単独で存在する。東西方向に約7m、南北方向に約4mの長方形を呈して高さは約80cmを測る。頂上部の標高は65.72mである。

封土（第15図 図版31図）

I層は表土で、この色調は黒褐色を呈し、厚さは10～20cmである。

II層は暗褐色を呈する。炭化物の混入が認められ、粘性がある。

III層は明褐色を呈し、粘性はなく1～2mmの砂粒質を含む。

IV層は地山土である。色調は赤褐色を呈し、粘性はなく砂質である。

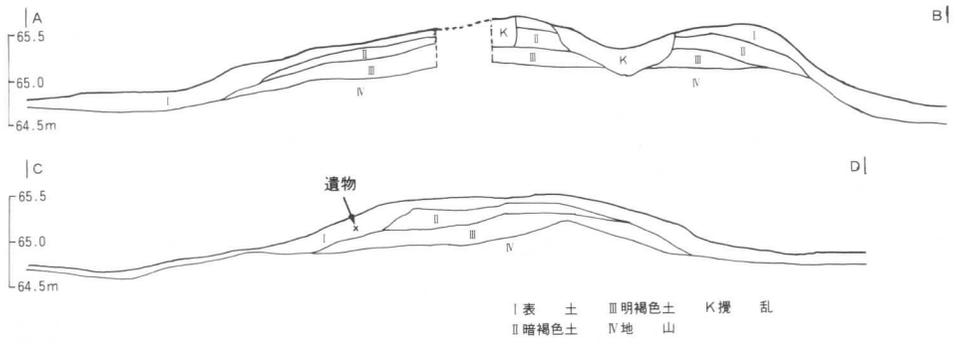
基底部（第16図 図版31図）

周辺を10～20cm削り出しており、特に北東側では比高差が約70cmほどある。中央部の頂上に認められた凹みは基底部にも達しており、断面図からも後世の攪乱と認められる。

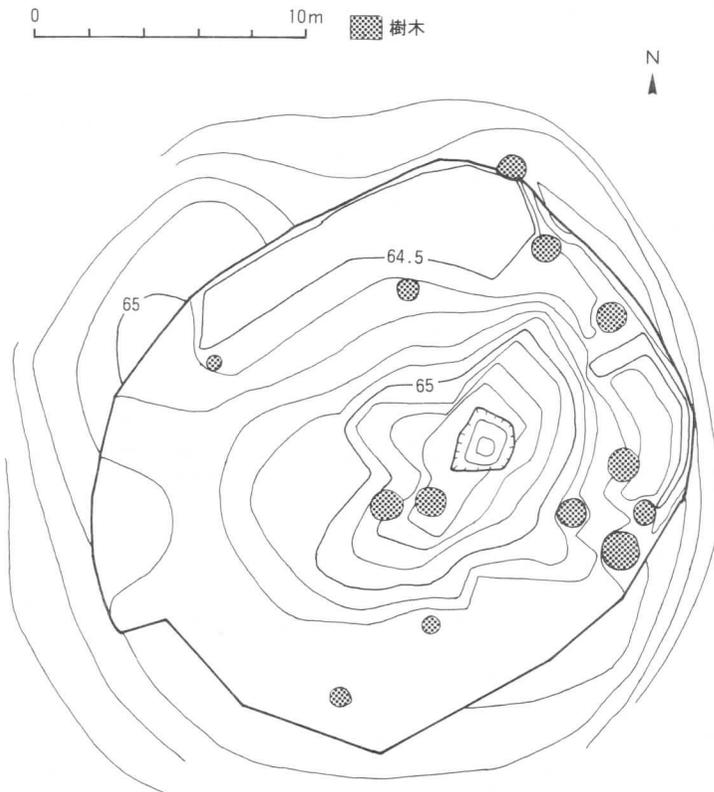
遺物（第17図 図版35図）

1点であるが上下に臍をもつ、石造物の一部が発見されている。高さ約13cmで幅約13cmの立方体で上下に高さ約1.2cm、直径約3.5cmの半円形を呈する臍がある。石質は凝灰岩で、全体にタガネによると思われる整形痕が残る。一部に研磨痕が認められ、砥石として転用されたものと思われる。表土の黒褐色I層中からの出土である。また同種の石造物が他に認められない。

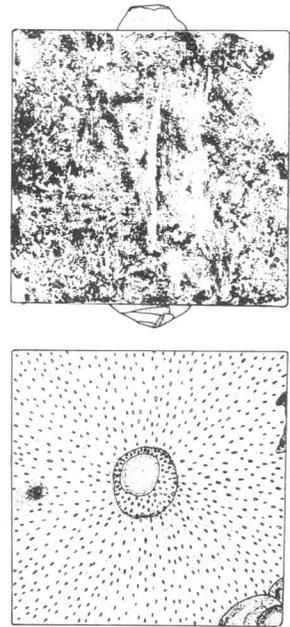
#### 5. 坊山3号塚



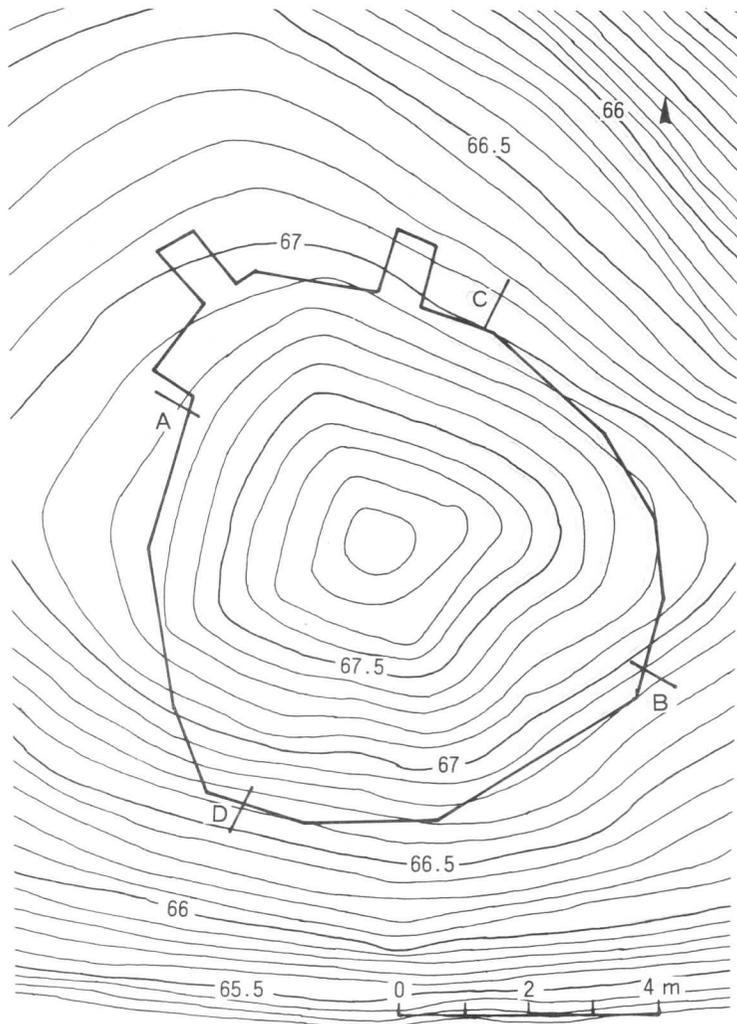
第15図 坊山2号塚断面図



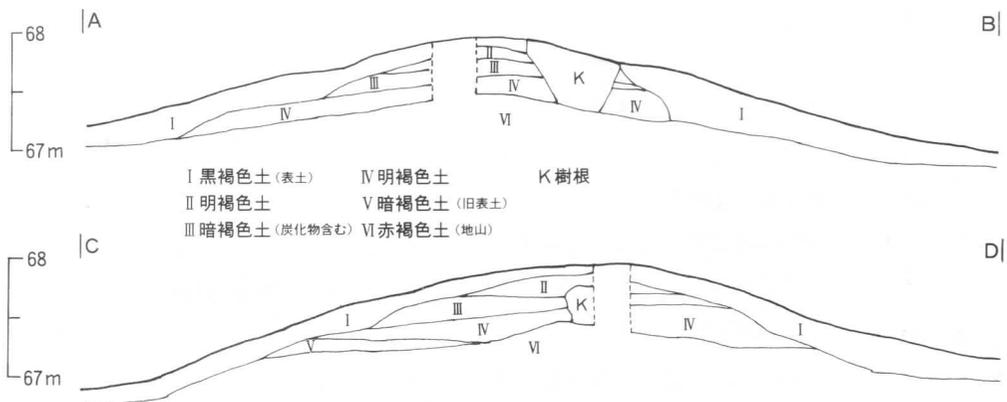
第16図 坊山2号塚基底部



第17図  
坊山2号塚出土  
遺物



第18图 坊山3号塚平面图



第19图 坊山3号塚断面图

**現況** (第18図 図版29図)

南北の尾根上に2基の塚が直線で約20mの距離で並び、その東側に位置する本塚は東西約6m、南北約6mで、高さは約1mの方形を呈する。北東側は崩れによると思われる緩かなスロープを持つ、頂上部の標高は67.98mである。

**封土** (第19図 図版29・32図)

I層は表土で、この色調は黒褐色を呈して10～40cmの厚さを測る。

II層は明褐色土で粘性はなく、1～2mmの砂粒質を含む。

III層は暗褐色土で中に炭化物を混入し、土質はやや粘性がある。

IV層は色調、土質ともII層と同じである。

V層は色調、土質ともIII層と同じである。基底部直上にあることから旧表土層と思われる。

VI層は地山土で赤褐色を呈し、砂質土である。

これらは断面では三段方形を意図的に盛土がなされたと思われる。

**基底部** (第20図 図版32図)

塚の南北側を約20cm程削りだしてあるが、東西方向はあまり削りだしていない。

**遺物**

図示しなかったが鋳滓が1点検出されている。

## 6. 坊山4号塚

**現況** (第21図 図版29図)

3号塚と並んで尾根の西側に位置する。本塚は東西約6m、南北約6m、高さは約1mの方形を呈する。前記3号塚と形態が似る。標高は67.00mで、3号塚との比高は約1mである。

**封土** (第22図 図版29・33図)

I層は表土で、この色調は黒褐色を呈する。厚さは10～50cmである。

II層は明褐色土で1～2mmの砂粒を含む。

III層は暗褐色土で炭化物の混入があり、粘性もある。

IV層は黒褐色土で炭化物の混入が多い、旧表土と思われる。

V層は地山土で赤褐色を呈し、砂質を含む。

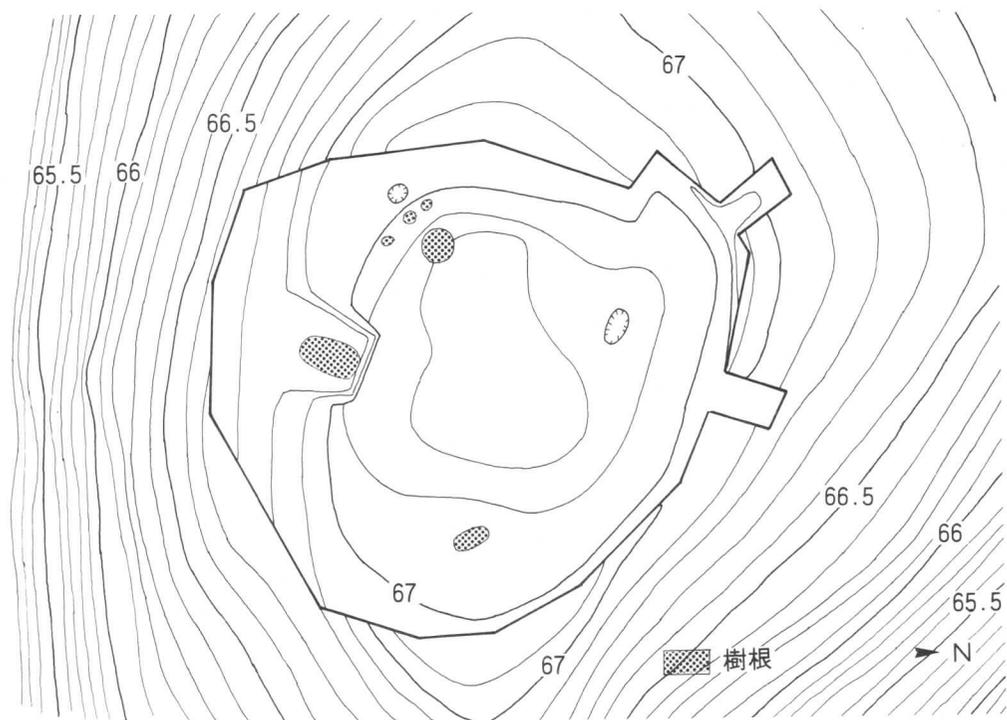
盛土の段階で三段方形を意図して、盛土がなされている。

**基底部** (第23図 図版33図)

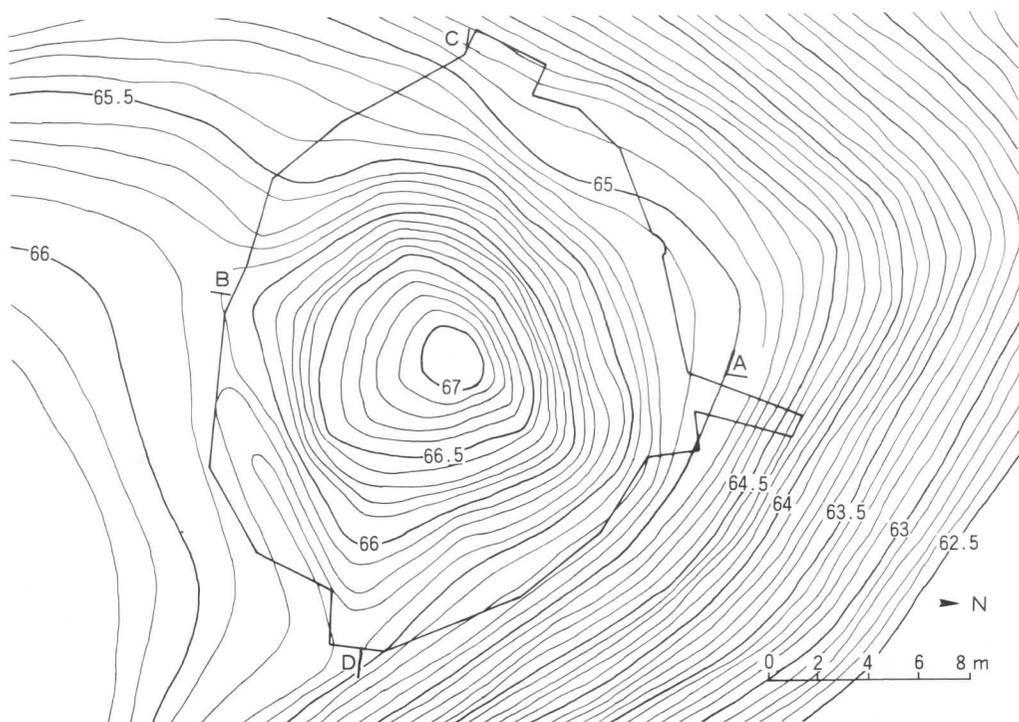
尾根の北側を約50cmほど削りだしてあるが南側は20cmほどである。基底部内には溝や土坑状のものは認められず、南側断面の基底部直上に炭化物を多く含んだ黒褐色土層が、レンズ状に推積するのが認められただけであった。

**遺物** 本塚からは遺物と認められるものは検出されなかった。

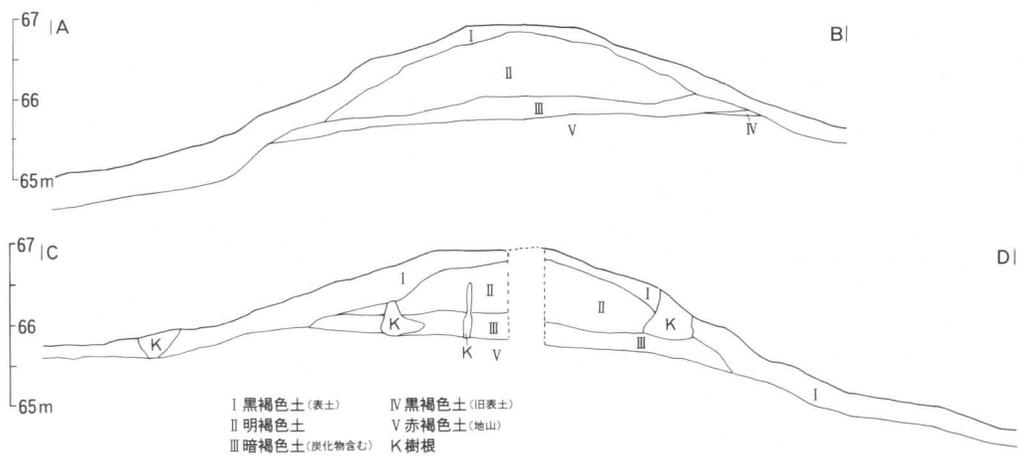
(小林 義廣)



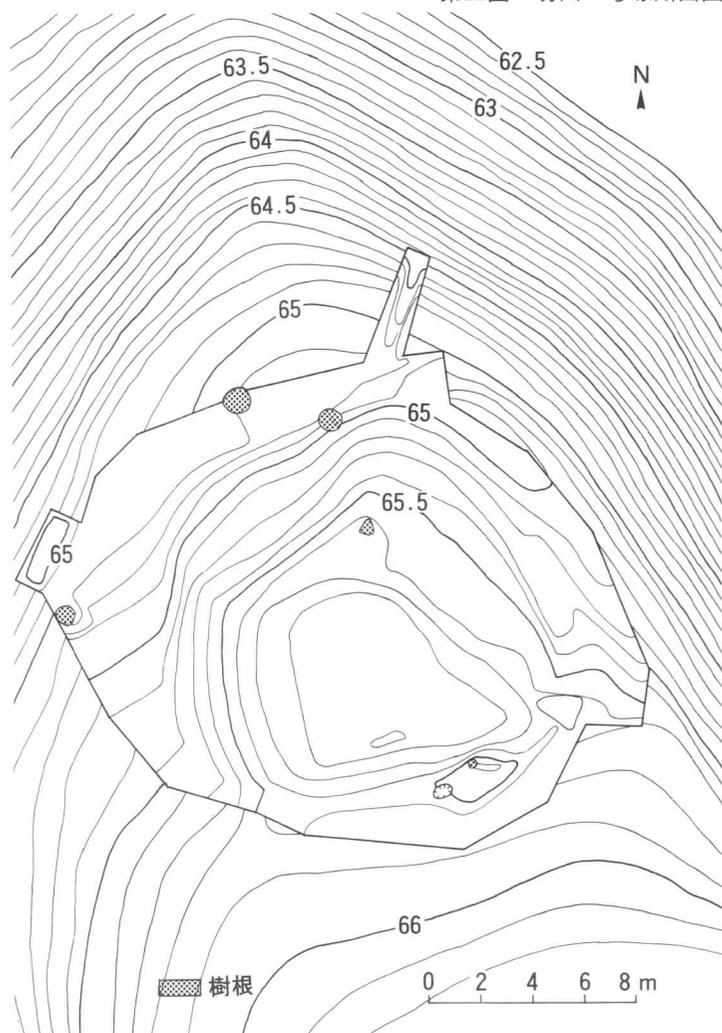
第20圖 坊山3号塚底部



第21圖 坊山4号塚平面圖



第22図 坊山4号塚断面図



第23図 坊山4号塚基底部

### Ⅲ ま と め

本調査の対象となったのは、花立塚群4基のうち2基の塚と、坊山塚群4基の計6基で、発掘調査面積は670㎡であった。6基の塚は、標高約63～81mの丘陵頂上に5基、他は丘陵尾根の旧道沿に立地している。塚はともに、日本海や集落・耕地などを眺望できる景勝の地を占地している。調査の結果、塚の形態は方形が5基、長方形が1基で、塚の規模は1辺10～11mが2基、1辺6mが2基、4mが1基で、7×4mの長方形が1基である。高さは0.5～1.8mを測る。遺物は和鏡1とその埋納施設、木炭埋納施設を検出し、多くの情報を得ることができた。

これらを箇条書にし、「まとめ」としたい。

#### 1. 塚の特色

##### (1) 基底部は削り出し成形

6基の塚は狭い頂上や尾根の稜線上を占地し、いずれも基底部を削り出している。この狭い占地域では塚の盛土を確保する最良の方法が、基底部を削り出すことである。それは、基底部を方形または長方形に整形し、基底面をほぼ平坦になる様旧地表面を削平する。基底面を削り出すその高さは、丘陵頂上を占地する塚の区域と頂上の傾斜面によって定まる。東に緩傾斜する斜面上に所在する花立2号塚の基底部は、西側が0.4m、東側は0.8mの削り出しを測る。

本遺跡の6基の塚は、基底部を削り出しによって成形されている。削り出しの規模は、塚の底辺の大小と塚の占地する傾斜の緩急によって定まる。

##### (2) 塚は三段版築

花立1・2号塚は三段版築である。花立1号塚は削り出しによって成形された基底部上に、厚さ約0.5mに炭化物が含まれる旧表・橙褐色土を積み上げて一段目を版築し、二段目は約4.5mの方形に厚さ0.5mの土を一段目の上に積みあげて版築し、その上に約2.5mの方形に厚さ約0.3mの土を盛りあげて三段目を版築してある。

特に花立2号・坊山3・4号塚は、削り出しの基底部の上に、三段に土を盛りあげている。また三段に土を盛り上げようとしている。この塚の成形技法は花立1号塚の成形技法に近似している。

坊山3・4号塚も三段版築であるが、小規模のため、花立1・2号ほど断面が明確に三段に現れていない。

#### 2. 埋納和鏡

##### 埋納施設

花立1号塚の中央は、約8cmの厚さに黒色土で覆われている。この層の直下には、厚さ約9cmを測る木炭、灰と暗褐色の焼土交りの層が東西1.5の範囲で検出された。この層の中央直下

には、東西0.9m、深さ0.6mの掘り込みが確認された。この掘り込みの内部は、木炭を多量に含む黒色土が充満していた。この掘り込みの平面形はほぼ円形、底は丸底、断面は深鍋形である。

### 和 鏡

埋納施設の中央西寄り深さ0.4mの位置に鏡背を西に向け、直立した状態で検出した。

和鏡の直径7.3cm、縁高4mmで、鏡面は若干内湾し、全体的に錆が湧出しているが、遺存状況は良好である。縁は蒲鉾式膨側高縁で、界圏は中線二重圏である。紐は素文亀紐で、頂部は紐ずれによって磨滅している。洗條の時紐の穴の両端に紐緒が白く残存しているのを確認した。鏡背の文様は主に桐をあしらったものと考えられる。素文亀紐の上方には左右対象の鶴が2羽向い合って、その嘴は亀紐の亀の口と接嘴している。縁の形式や鏡背の文様から室町時代後期のものと考えられる。

## 3. 塚の構築年代

花立1号塚は、三段版築のほぼ中央の掘り込み内から検出した和鏡の製作年代と考えられる室町時代後期の構築と推定される。

花立2号塚の表土内から石臼・寛永通宝文銭と肥前系磁器碗とが出土したが、搬入品と考えられる。また古式土師器が旧表土から検出されたが、塚構築年代以前のものであって、出土品から構築年代を考えることはできない。

坊山1号塚から出土した須恵器長頸壺・甕の破片はⅠ・Ⅱ層からの出土であって、塚の構築年代とは結びつかない。

花立1号塚以外の塚の構築年代は不明である。

### 〔追 記〕

花立1・2号塚の穴の覆土中および旧表土中から古式土師器と考えられる細片を検出した。このことは1・2号塚の周辺、特に塚群の東側に広がる緩傾斜面と、西側の平坦面に古式土師器の包含層の広がり予想された。

また、坊山1号塚のⅠ・Ⅱ層から検出した須恵器破片は、1号塚周辺に所在する表土下付近に包含層の広がり予想された。

発掘調査の時点で、花立1号・2号塚間にトレンチを設定し、地山まで発掘調査したが、遺構遺物は発見できなかった。

新潟県文化行政課では、平成3年6月3日から5日にかけて、花立2号塚の東側緩傾斜面と1号塚の西側平坦面とに14か所のトレンチを設定し、坊山1号の東西付近で10か所のトレンチを設定し確認調査を実施した。

この結果、遺構、遺物は検出されなかった。

(秦 繁治)



第24図 花立・坊山塚群の遠景

- 1 花立塚群
- 2 坊山塚群
- 3 八幡林遺跡



1 東より全景



2 北より1・2号塚間トレンチ



3 東面の南北断面 左側に土坑1



4 北面の東西断面 西側



5 北面の東南断面と土坑1



6 土坑1の完掘り



7 北西の土坑2



8 和鏡出土状況 西面の中央部

第25図 花立1号塚



断面図



基底部

第26図 花立1号塚



1 花立1号塚より2号塚を



2 2号塚全景 西より



3 2号塚 西より



4 2号塚西面の南北セクション全景



5 2号塚北面の東西断面



6 2号塚溝状遺構



7 2号塚土器出土状況



8 坊山1号塚全景

第27図 花立2号塚・坊山1号塚



断面図



基底部

第28図 花立2号塚



1 坊山1号塚 遺物出土状況(北面の西南トトンチ)



2 坊山2号塚 南より



3 坊山2号塚 北側から北面の地山



4 坊山3号塚 東より



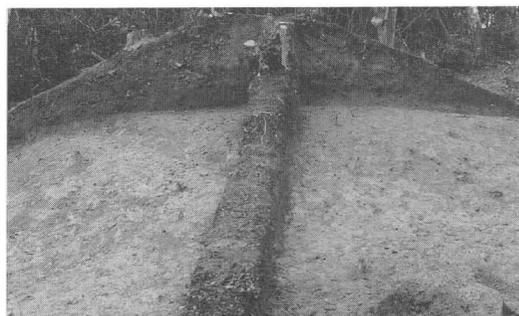
5 坊山3号塚 南面の東西セクション西側



6 坊山4号塚 南東より



7 坊山4号塚 南東面のセクションと地山



8 坊山4号塚 北面の東西セクション

第29図 坊山塚群



断面図



基底部

第30図 坊山1号塚



断面図



基底部

第31図 坊山2号塚



断面図



基底部

第32図 坊山3号塚

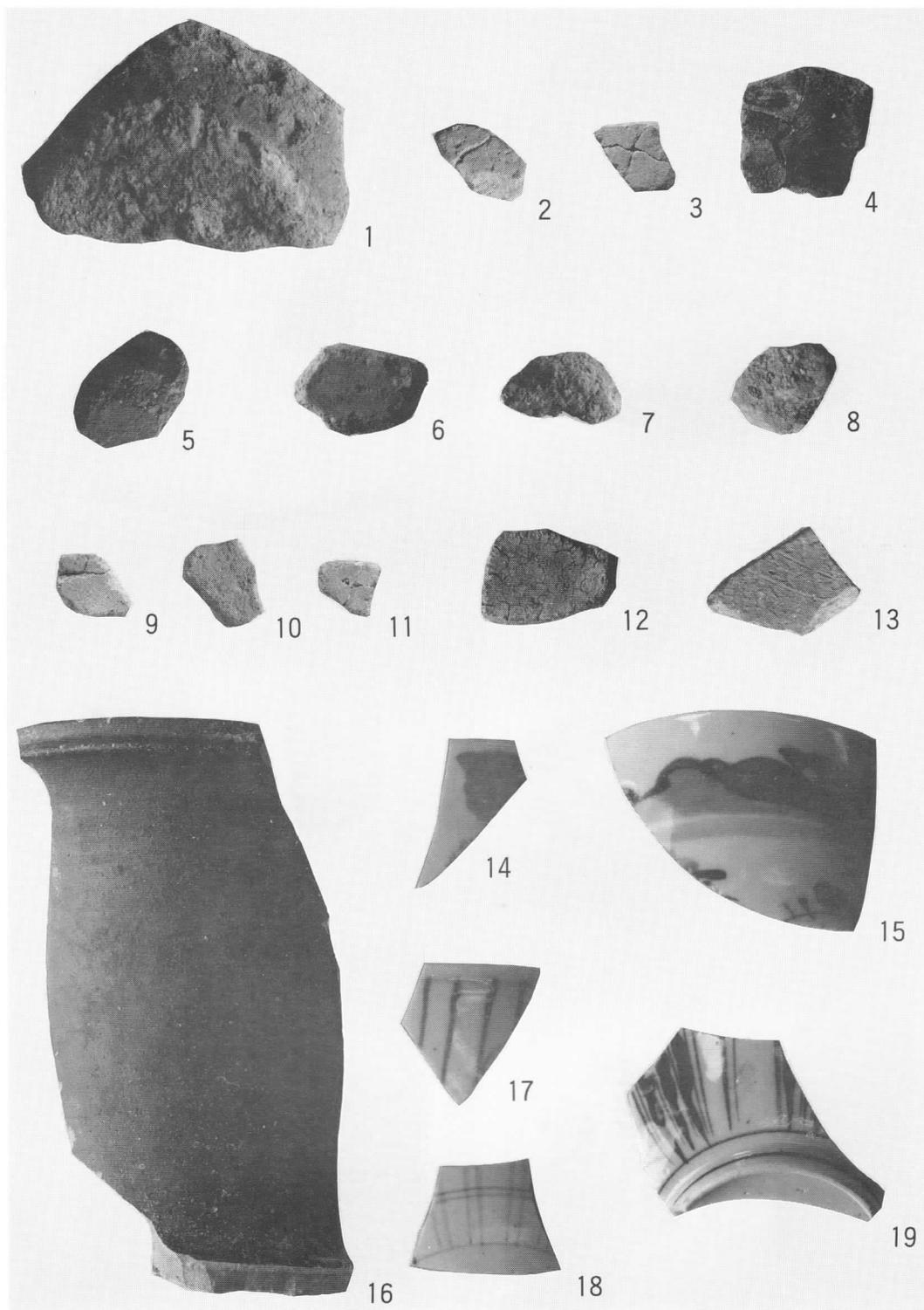


断面図

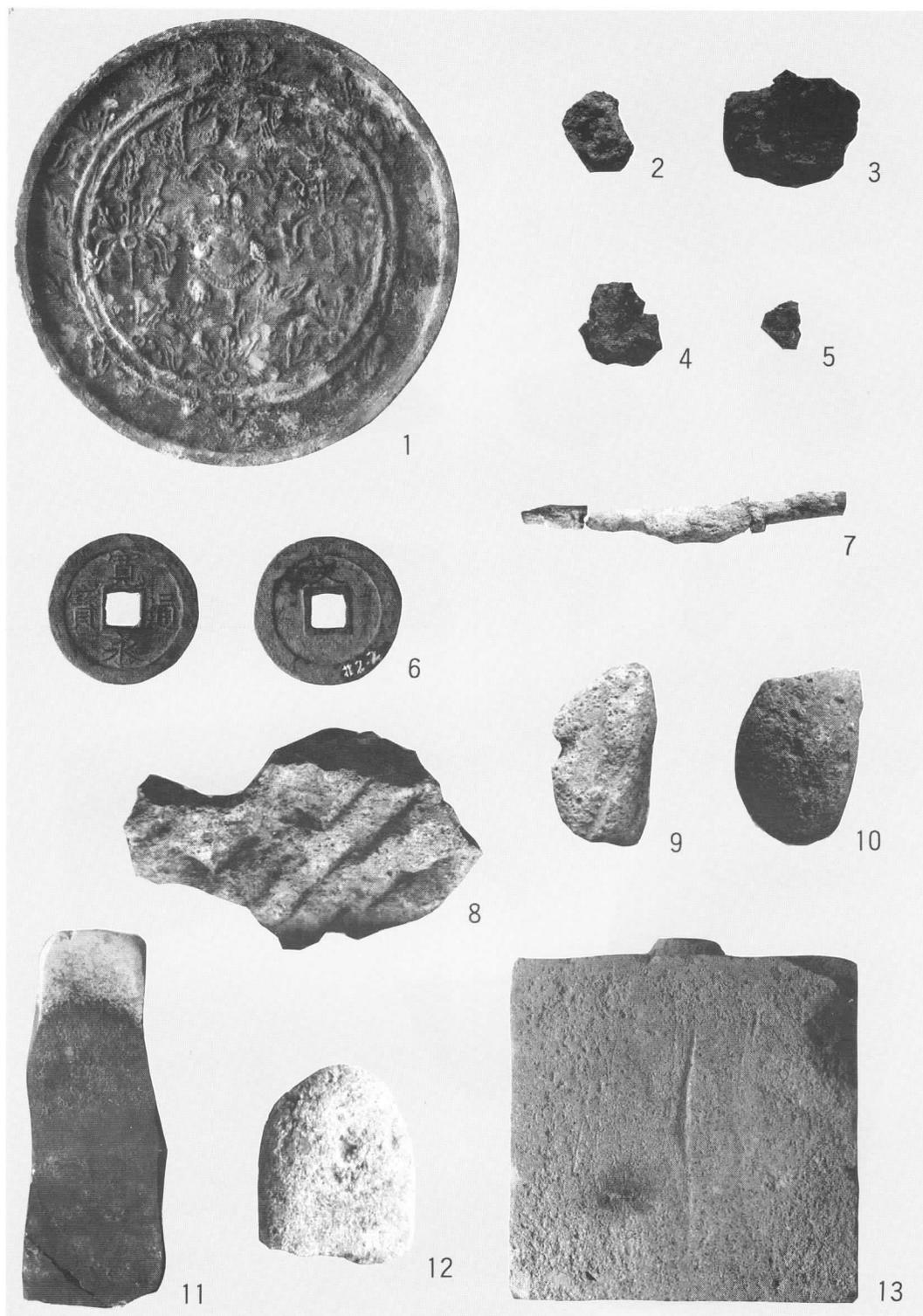


基底部

第33図 坊山4号塚



第34図 遺物 土器・陶磁器



第35図 遺物 鏡・金属製品・銭貨・石製品

---

## 花立・坊山塚群発掘調査報告書

——平成3年度の調査——

平成4年2月18日発行

編集 秦 繁 治

発行 〒940-25

新潟県三島郡寺泊町大字寺泊

字上田町7695-1

寺泊町教育委員会

電話 0258(75)2446

印刷 三条印刷株式会社

〒955 新潟県三条市元町9番3号

電話 0256(32)2281

---

